

昭和三十四年七月二十三日發行
（三種郵便物認可）
（毎月一回、十五日發行）

（通第一二九号）

慈

光

目 次

臘月に祖聖を仰ぐ……………	聚 墨 生……………(1)
繫縛と解脱(四)……………	近角常観……………(2)
近角常観先生の御一生を追憶して……………	福島政雄……………(8)
耳の底にのこるもの……………	柳瀬留治……………(16)
求道会館の磬石……………	花田正夫……………(21)

第十一卷

第十二號

臘月に祖聖を仰ぐ

晩秋から初冬にかけて報恩講があちこちに催され一入祖師が慕われます。ことに七百年の昔、鎌倉初期の新人仏教の動きが偲ばれてなりません。誰も知られる通り平安末期から鎌倉時代にかけて、国内には平家は亡び源氏が興り、やがて北条氏に政権は移り、国外には蒙古の襲来もしきりに起つた時、世を挙げて真実の光明を求める声は巷間に満ちたのであります。然し名刹の学問と現世の祈禱のみに終始した奈良や叡山の大伽藍の中には、その求めに應える者もなかつた時、仏陀のまことの生命は、新人仏教の動きとなつて旧套を脱してほとぼり出たのであります。

その動きが二つに分れ、一つには持経者、一つには沙弥生活者と呼ばれました。前者は「釈迦の昔に還れ」と叫んで遠く俗塵をさけて持戒持律の聖者の生活を理想とし、笠置の解脱、梅尾の明恵の両上人がその代表者でありました。後者は尽十方無碍光の照護の下にあつて、在俗の生活を続けながら、それに障えられず、泥中に蓮華の生ずる如き生活者で、法然、親鸞の両聖人がその代表者でありました。然し時の流れと共に持経者はその後継者を失い、沙弥

生活者の道は年々に伝承されて来たのであります。

聖人の畢世の御著、御本典後序に「聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土真宗証道今さかんなり」と歎ぜられ、その総序の御文に「……凡小修し易き真教、愚鈍行き易き捷徑なり……心算く識すくなく、悪重く障多き者。ことに如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行に奉え、唯この信をあがめよ」と、悲心切々として我等を待ちに待ち給うた狂乱の如き聖意を拝するのであります。

ことに臘月八日は釈尊の降魔成道の聖日であり、近くは近角常観先生の御往生の月であります。芭蕉翁の句に

ふるさとや臍の緒に泣く年の暮

とありますが、歳末何年振りかに故郷の家に帰つた翁の目に、自分の臍の緒が大切にしまわれているのを見出し、今更のように親心のまことにさめんと涙する心であります。歳末、念仏のおとすれをうけては、我身の幸慶を感じ、とどけて下さつた知識の方々の悲心があらたに仰がれることでもあります。

聚墨生

繫縛と解脱(四)

近角常観

十九、悪人もつとも往生の正因なり。

さてそこで、昔から聖徳太子の御言葉だと言われて居る御文に、

『善なおとらず、況んや悪をや』

というお言葉がある。何とやら今の『歎異抄』の三章のお示しに似ていると思うたのであるけれども、併し「善なおとらず」がどうもはつきりしなかつたのであるが、斯く頂くと「善なおとらず」は、善人が如何に善を積むも、その善をひるがえさなくてはならぬとの事である。

すれば、善人さえ、かく己が善にはこる思いをひるがえして、仏の御救いを蒙るのである。既に善人がかく其の善が何の役にも立たぬのである。「況んや悪をや」は、況んや一の善も無き悪人が「自分の如き悪しき事では」とは、何言つて居るのであるか、という事になるのであります。すでに金持が所持して居る、その金さえ取らぬのである。然るに一文の金もない、その浅間しき奴が「こんな金のないことでは」とは、何を言つて居るのであるか。

既に善があつてさえ取らぬのに、今悪人が「自分はこん

な悪があるから、こんなことでは」と言うて居るは、畢竟善人が善を頼むと腹は同じで居るのである。

仏のやる瀬なきお心では、そも／＼吾が大悲の前に「自分如きこんな浅間しき事では」、「こんな貪乏なことでは」とは、汝何を取り違いて言うて居るのであるか。仏の大悲の前には、すでに自力作善でやつている善人さえ、其の作善が駄目になりて、他力本願に帰入するのである。況んや、我々煩惱具足の凡夫は、善と言つたらひとつも出来ぬ。その出来ぬ分際で「こんな悪しき事ではいかぬ」とは、何をたわけた事を言つて居るのであるぞ。我は実に汝が其のして見よう無き者じやによりて、地獄におちる。その墮ちるを哀れめばこそ……先程も申した御文であるが、今の三章の続きには、

……煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。

今日は、ここ一つを申し度いのである。仏のお慈悲は実に斯く「私がどうしようもない処が哀れである」、「喜べぬ処が可哀相である」、「出来ぬところが不愍である」という、この「煩惱具足の我等は、何れの行にても生死を離れることある可からざるを哀れみ給いて、願を起し給う本意悪人成仏のためなれば、云々」という、此の外に無いのである。かく、最早や、いずれの道も絶え果てて、地獄に墮ちこむ悪人を、手を延べて引攫んで下されたが、仏の大悲の本願なのであります。

而してもその本願の遣る瀬無きは、

本願力にあいぬれば、むなく過ぐる人ぞなき

功徳の宝海みち／＼て 煩惱の濁水へたてなし。

其の哀れみて下さる本願が強きか、此方の逃げ廻る私の力の方が強いのか。仏の御親切の程が強いのか、此方がこんな事ではと遠慮して心の方が強いのか。私の方は、何処までも疑い強き奴なれども、

願力無窮にましますれば 罪業深重もおもからず、

仏智無辺にましますれば 散罪放逸もすてられず。

仏のお慈悲の方が強いため、如何に通げ廻る奴も、遂にそのお慈悲に捕えられ、その飽くまで広大な御親切のために、遂に此方の胸底まで打ち割られて「あ、よくも／＼これ程悪しき私を、そこまでお見捨て無きお慈悲なるか」

「成程、それまでの御親切なる仰せなりしか」

と、茲でそのやる瀬なき御言葉に、今まで長い間の心配の夜が明けた時は、「不思議の仏智を信ずるを、報土の因としまえり」である。

さて次の「信心の正因うることは、難きがなかになお難し」で、此の眞実信心の正因を得ることは、実に難中の至難である。若しここで間違えて「悪いけれどお助け」という風に頂いて仕舞つた時は、報土の正因とはならぬ。それは、悪い奴が当り前でお助け、ということになつて了うのである。

しかるにここをも一歩思い切り頂くと、

「そんな悪いけれどもか、こんなことではとか、そんな善し悪しに係わつた事じや無い。もと／＼汝がその業報にく／＼られて出られぬ処が哀れで起した本願なれば、汝が悪いから、弥々間違わさぬのである。善くないから弥々見捨てられぬのである」

と。最早や手も足も出ようが無く、而も其の者がお見捨てなき、大悲の願力無窮に浮かばされて、最早やもがこうと思つても、もがく事が無い。かくして「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなり」と信ぜさせて貰つた処が、「よくも／＼この悪人」と、不思議の仏智を信じた処である。

と、茲で「願を起したまう本意、悪人成仏のためなれば、他力を頼み奉る悪人、最も往生の正因なり」であります。で、悪人が正因である。他の者の為には在るのでは無い、唯悪人だから救われるのである。「他力をたのみ奉る悪人、最も往生の正因なり」と仰せ給るのである。どうかと言うに、悪人のこの仕て見よう無き奴がよくも／＼此の者を捨てさせ給わぬ大慈悲でましますと、このやる瀬なき思召しに腹一杯満足して、後生助け給へと仏に向いた時が、他力を頼み奉る悪人、最も往生の正因であるからであります。

二十 不思議の仏智を信ずるを

又、「和讃」には

不思議の仏智を信ずるを 報土の因としまえり、
信心の正因うることは、難きがなかになお難し。

頂くは何処から頂いても同じ事である。今日まで「こんなことではいかぬ」「こんな浅間しいことではいかぬ」と言つて居つた者が、

「浅間しいからいかぬと言う事があるうか。浅間しいから弥々汝を助けねばならぬのである。汝は世の中が駄目と言うも、駄目だから、我は汝が見捨てられぬのである。」

とやる瀬なき仰せを承りて

而して其の信ずるを「報土の因としまえり」……茲で今の三章には「煩惱具足の我等は何れの行にても生死をはなるることある可からざるを哀れみ給いて」即ち我々が何とかしてと、手足をまがげばもがく程、弥々する／＼と墮ちこんで仕舞う。その墮ち込む様を哀れませ給いて、「願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば」……救いの手を下された本意は、其の悪い者が捨てられぬとのやる瀬なき思召しの外無ければ「他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり」……よくも／＼斯くの如き私を、お見捨てなき大慈の有難やと、他力を頼み奉る悪人が、最も往生の正因である。即ちやる瀬なき大悲に打明かされて、我が身は弥々地獄一定の悪人と、お見捨て無きお慈悲の中と、真に知られた時が、往生の正因である、との仰せなのであります。

二十一、善もほしからず、悪もおそれなし

そこで又『數異鈔』の一章には、

弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとすべし。そのゆえは罪業深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。しかれば本願を信せんには、他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆえに。悪もおおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故にと云々。

さて、「罪惡深重、煩惱熾盛の衆生を助けんがための本願」ということと、「老少善惡の人をえらばれぬ」という事とが、一寸聞くと、先の場合と同じく、「老少善惡の人をえらばれぬ」というのは、善くても、悪くても善惡に係わらぬという事になり、「罪惡深重、煩惱熾盛」の方は、悪人を主としてのお助けということになり、何か其間多少喰い違いがある如く思われるのであります。

けれども、これが今言う如くで、仏のお慈悲の前には、我々の善が何等の力もなく、又悪が何等の障りにもならぬのである。言い換えれば、仏のお慈悲は善きも、悪しきも、唯我がやる瀬なき慈悲一つで救うとのお慈悲にて、そのお慈悲は、即ち我々が斯く日夜、善いとか、悪いとか言うて居る、その罪惡深重煩惱熾盛の者を見捨てぬとのお慈悲である。すれば我々の上に最早や、あゝこう心配することは無い、との仰せなのであります。

全体このお慈悲頂く上より言う時は、我々が今日まで、善きを善しと思ひ、悪しきを悪しと心配して、本願の不思議にて助けて下さるという事を知らずに居るが、第一間違いなのである。

『歎異鈔』十三章のお示しには、
なにごとにも心にまかせたることなれば、往生のために千人殺せといわんに、即ち殺すべし。しかれども一人にて

誠に我々が、罪惡の深きほどを知らず、如来の御恩の高きことをも知らずして、我人も善し悪しと言う事にのみ日夜腐心して居るは、是れ仏のお慈悲がわからぬからである。……

……聖人の仰せには、善惡の二つ総してもて存知せざるなり。そのゆえは、如来の御ころによしと思し召すほどに知りとおしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしと思召すほどに知りとおしたらばこそあしきを知りたるにてあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よるずのこと、みなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみをまことにしておわしますとこそ、おおせはさうらしいか。……

然るにこの広大のお慈悲を聞かせて貰うと、今まで長い間何とかしたら善きことが出来ようと思つて居たのであるが、我々の心に善き事とは一つも出来ないであつた。否今まで、どうかしたら親に孝行が出来よう、人に親切が尽されようと、高慢に暮して居たこの私の心中を哀れみ給いて、かくまで御苦勞の親の御まことと頂くと、今日まであれがよい、これが悪いなどと、一つ角自分で善し悪しを知り顔に言うて居たのが申し訳無き間違ひであつた。

「如来の御心に善しとおほし召す程に知り通したらばこそ善きを知りたるにてあらめ、」又「如来の悪しと思召す

も殺すべき業縁なきによりて害せざるなり。わが心の善くして殺さぬには非ず。また害せじと思つとも、百人千人を殺すこともあるべしと仰せの候いしは、我等が心の善きをばよしとおもひ、あしきことをばあしと思ひて、本願の不思議にてたすけたまうということをしらざることを仰せの候いしなり。……

我々が心の善きをば善しと頼みにし、又悪しきをば悪しと心配しなければならぬというは、未だ此の者を、本願の不思議にて助け給うという事が頂けぬからなのである。さりながら、弥々このやる瀬なきお心を聞かせて頂くと、我々がこの虚仮不実の身を以て「もつと善いことを仕度い」などとは何事であるか。仏のお慈悲の前には我々の善が決して善にならぬのである。又このお慈悲頂くとき、我々が悪じや／＼と惡を苦にするは、仏の長々の、悪人をお見捨て無き御辛勞を無にするものである。

『歎異鈔』結文のお示しには又、
……さればかたじけなくも、我が御身にひきかけて、我等が身の罪惡の深き程をもしらず、如来の御恩の高きことをも知らずして迷えるを、思い知らせんがためにてそうらいけり。まことに如来の御恩ということをしらばさたなくして、我もひと、善し悪しということをしらばさたなくして、……

ほどに知り通したらばこそ悪しきを知りたるにてもあらめ」。今迄人が悪しきと言うては人のため心配し、自分の悪しきというては、自分のため苦にして居たのであるが、仏のお慈悲の前に、我々があれがよい、これが悪いなど、何の面目あつて言えようぞ。『皆もてそらごと、たわごと、まことあることなきに、唯念仏のみをまことにしておわします』と、今日まで、長々善を欲し、惡を悲しと苦しんだことが、皆一場の夢と化し、唯遺るは、何がまことかと言うに、真のまことは、真の仏のお慈悲の外に無い。其の外は皆もつてそら事、たわ事、最早や此の外に善が出来るも出来ぬも無くなりて、斯くの如く日夜、善いとか、悪いとか苦しみて居るが、これが人間の浅間しき処である。これが業報に縛られて動かれざる様である。この者をば徹頭徹尾御覽あつて、飽くまで助けんならんと申し召し給はるは、三世十方を尽さる唯南無阿彌陀仏のおまこと一つ。その御まことは、私如きまこと無き者を捨てさせ給わぬまこと、私如きまことの奴を哀れませ給うまことにてましますと、茲を頂く時は、最早や南無阿彌陀仏、々々々々と、唯お念仏の外は無い。

斯く頂くと、最早や、善も欲しからず、惡も恐れなしてある。何故かというに、是れ偏に、悪人正機の本願でまします故に、悪人をお見捨てなき広大のお慈悲でまします

が故に、遂に今まで善人と自惚^{うねほ}れて居た者も、その善をひるがえし、悪人を悲しんで居た者も、その悪をひるがえし「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」である。「唯信心を要とすと知るべし。其の故は罪惡深重、煩惱熾盛の衆生を助けんがための願にてまします」……斯くして広大なる仏の大善大功德を頂いて見ると、今まで善惡別であると思つて居たが、善いも悪いも皆すべて、罪惡深重煩惱熾盛の衆生であつたのである。

も一つ言つと、茲で今までは善惡の意味が一転して、惡というは、このお慈悲を頂かずして、人間の私がやることは、善いも悪いも、皆惡である。善というは、唯この者を見捨て給わぬ広大なお慈悲ばかり。何が眞の助かと言へば、この悪しきを見捨て給わぬ、天の覆^{おほ}える如き、広大の南無阿弥陀仏ばかりである。

茲になると最早や「本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに、惡をも恐るべからず、弥陀の本願をさまざまぐるほどの惡なきが故に」………：…何が善と言つても、この南無阿弥陀仏以上の善あること無く、又この南無阿弥陀仏まします上は、惡をおそるる必要は更に無い。どれ程淺間しき者と雖も、その淺間しきを哀れみて願を起し給う本意、悪人成仏のためなれば、その悪しきを気づかひするには及ばぬのである。如何なる惡

と雖も、仏の助け給わぬ惡のある事は無い、となるのであります。

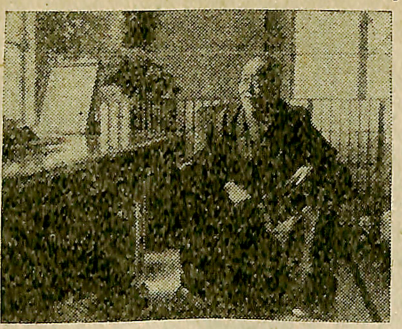
而してここが初めて私の胸に徹して下された一念が、信の一念である。その一念に仏は「嗚呼、長々のわが心配を遂に受取つて呉れたか」と、大喜びをなして下されて、其者を撰取不捨の光明中に収め取つて下さる。其上は最早や、動こうと欲しても、動く事が無い。聖人のお示しには、

「撰取不捨の故に正定聚に住す。
正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る。云云」
最早や動かれぬ正定聚の分人と定まるは、もと／＼お見捨て無きお慈悲の故に、その一念に光明中に撰取して放し給わぬからである。故に一度正定聚の住に至らせて貰うた者は、或者は滅度に往き、或者は往けぬという事はない。必ず往かせて頂けるに決定して居るのである。今日は甚だ長くなり、これにて畢^{おわ}る事と致します。

(十月十二日)

靈界の人近角常觀師 (一)

福 島 政 雄



一、此の父此の子

名山大沢は竜蛇を産するといふ。秀麗なる琵琶湖、その北岸に近い東淺井郡朝日村宇延勝寺は我が近角常觀師が誕生(明治三年)の地であつて、その生家は山谷派に属する西源寺という檀家二十七軒の小さな寺である。師の父君は近角常隨

師という、着実堅固な信仰の人としての任職であつた。常觀師が入信の後に書いて居られるところによれば、師の信仰は全く父君から繼承せられたのであるといふ。父君の非常な念力が常觀師の信心の花を開かれたのであるといふ、此の父此の子の關係は如何であつたか。

常觀師は幼少の頃から一徹^{いつてつ}なところがあつたようであ

る。物事を思いつけば言い張つてきかないという風であつた。七・八才の時京都の病院へつれて行かれた時に診察がすんで、他の同行者がその日に大津に帰ると言つたら、常觀師も一緒に帰ると言つてもきかれないので、父上は日暮から大きな子供を負うて暗夜に三里、手さぐりをして山路を越えられたといふことである。此のように物事に固執する性質ではありながら、実は内弁慶であつて、他人の言うことにはいや／＼ながらも服従するという有様であつたといふ。

然るに或る時、母上が新しく織つて下された着物を着て遊んで居られたが、他の子からさんさんに泥をつけられて歸られた。此の時、いつもはやさしい父君が、決して承知せられなかつた。他人に泥をぬられておめ／＼と歸つて来る腰抜があるか、是非とも泥をつけた奴に洗わせて来いと叱りつけられて、決して家に入れて下さらなかつた。此の父君からの大打撃によつて常觀師は、体面を保つことと謙讓とは區別すべきことを悟つたと云つて居られる。正しい

事のためにはどんなに苦しくてもこれを主張せねばならぬという考が養われた。この事が常観師の一生涯を支配するようになって、入信後の師には、正しいことはあくまで貫きとおすという精神が生きてゝとしていたのである。

父君は小さな寺の住職として子供の教育には非常に苦勞せられた。信仰の方面では求道の生活を続けられ、しきりに法を喜ばれ、求道のためには遠方まで出かけられ、門徒を教化し、夜の集りを催し、談話会を設け、懺悔を聞くなどのことを皆行われたという。そのやり方はよほど真面目であつて、偽りの懺悔や、道徳家ぶることや、殊勝らしくすることなどは大嫌いで、実意のない人とは話をする事も同席することも嫌われたという。臨終の時も殊に念仏を多く称えられるというのではなく「実に変らぬ、正直な、真面目な、確かな点は、自分の親ながら実に稀な人であつた」と常観師は父君を讃嘆して居られる。此の父君あつて常観師という人が出現せられたのである。

常観師の大煩悶の時には父君は非常に心配せられた。叱つたり慰めたりして見られても少しも効かなかつた。自分余命もない身体であるから、代られるものならば代つてやりたいと念せられたということであるが、併し此の時、常観師をその身体の危機、筋炎という大病の手術について

寸の間も面白いことはなかつたと、後に話されたというのであるから、父君は実にまた親としての愛情に充滿した人であることがわかる。

師が外遊から帰られて長崎の港に着き、御両親に無事帰朝の電報を打たれたとき、故郷では父君と母君と電報のとり合ひをして「諸根悦予で、身体中が嬉しいと言われた」ということであるから、実に此の親の慈愛、此の子の至孝、これあるかなと思われるのである。

かように慈愛深い父君であつたが、一方では信仰問題について、常観師に対して実に厳格であつた。よく「常観などもどつとせぬ」と言われたということであるが、これは実に慈愛の鞭の言葉であつたろうと思われる。師は此の親の慈愛の鞭に打たれて一生涯その信仰の一路をまつしぐらに進まれたのである。

父君は明治三十七年三月十二日に示寂せられたのであるから、師の入信後六年間ばかり存命せられたのである。すなわち我が子の信仰の歩みの進むのを且はよるこび、且は励まされたのである。常観師の信心を開かれたのも父君であり、励まし進められ、常に鞭打たれたのも父君であつた。此の父、此子、実に親子の因縁は深かつたのである。

二、朋友の信頼

常観師は朋友ということについては、非常な熱を持つて

果斷の処置を以てそれを救われたのは父君であつた。

或る時父君は、常観師の令弟に向つて「常観には剣道か柔道かを習わせて置きたい、若し他日西洋に行くようなことがある時、常観は力が弱く身体が小さいから西洋人に侮られてはならぬ」と言われたのを、常観師は後に令弟から聞いて「さては、親だわけにも程がある。我々には他の人たちがつて洋行する機会のある筈もなく、又その望みもない、それにかよふの事を言われるのは可笑しいことである」と考えられたということであるが、然るに常観師は父君の予想のとおり後に洋行せられたのであるから、ペルリンの宿において師は此の事を想い起し、十四五年前の父君の言葉をおもつて、無限の感慨に打たれたと書いて居られる。「親の言われたとおり、かく万里海外に居ることになつてあるかと考えたら、親の慈悲やら、仏の御恵みやら、胸に塞がつて感涙に咽び、とても横臥して居る訳にゆかず、早速床より出でて、口をそそぎ顔を洗い、満身の感謝を以て大経を誦読し初めた」と書かれています。師は実に至孝の人であつた。

父君は師が外遊に出立せられる時には、別れに臨んで実に勇ましく、最も屈托のない顔をして「十分やつて来い、さようなら」と言われ、師は父君の決心の潔いことに驚かされたということであるが、併しこの父君は師の外遊中、一

いた人であつた。その大煩悩の時には、何とかして真実の友がほしいと思ひ続けて居られたようである。また実際非常な真実な友人を持つて居られた。尋常中学時代からの友人で極く親しい人があつたという、その友人は尾張の人で常観師の大煩悶の時に夢を見たということである。その友人の家というのはお寺（尾張大野、広覚寺）であつたというのであるが、或る晩空中から黄色を帯びた火の玉が飛んで来て、そのお寺の玄関前の蘇鉄のまわりを非常な速力でぐる／＼とまわつたが、やがてほかつと消えたと思つと、常観師が苦しい顔をして突然現われて来て、疾風の如くにその友人の肩を掴んで何とも訳のわからぬことを言うて訴えた。そこで友人は、近角君ではないか、君その有様は何事だというて慰めようとしたら直に夢がさめたということであつた。それが恰度常観師が松島で苦悶の最中のことであつたというのであるから、友の誠が感応したものと云わねばならぬ。

その松島の講習会もそこ／＼に近江への帰路、師は右の友人のところへ寄つたのであるが、友人は師の願を見るなり、「あゝ是であつた」と直にわかつて、無言の間に深い同情をそそいで大層師を慰めた。

かよふの友人を持ちながら師はなお真実の友人をほしいと思ひ続けたのである。友人ということが師の心の病的癡

滞^{クム}となつていたものと思われる。而して最後の解決は佛陀こそ眞実の友人であるということであつた。これは師が友人というものに対する信賴の非常に深かつたことを物語るのである。

師が東京帝国大学哲学科三年の時の同期の友人或は同窓生としては下村宏、吉田静致、常盤大定、境野黄洋、松村楚人冠などの人々がある。いずれも周知のとおり明治大正の精神界においてそれぞれ大なるはたらきをした錚々^{ソウソウ}の士である。それ故友人相互の切磋^{セツカ}といふことは師が深く感ぜられたことに相違ない。池山榮吉師の如きは常觀師と莫逆^{モクギャク}の友であり、西洋の生活を共にし、同一念佛の下に終生かわらなかつた真に美しい友情の模範とも仰ぐべきことである。

古ギリシヤの哲人アリストテレスは友情といふものを道徳の根源と考えたようであるが、親といふことは考えなかつた。常觀師は友情といふことに非常な熱を持つた人でありながら、その友情の根源を養うものは親の慈愛であり、徹しては念佛であるといふところに落ちついた。そこに佛教の眞実性がある。常觀師と池山師においては実に佛教が生き生きとしていて、その友情は仏陀の慈悲の裡において永遠に結ばれていた。

常觀師が宗教的同朋^{トウポン}といふ題で書かれた文章がある。そ
下にお念仏の上に照らしあわれるというような關係であつた。池山師の令室が医者から胃痛と診断せられ死の宣告を受けられた時、非常な絶望の中にお念仏の慰めを常觀師へ手紙を以て告げられて居り、常觀師はまた信仰の上から一心にこれを慰められ、お念仏の上にびびきあう世界が開かれている。此のようになれば此の世の友情はそのまゝに久遠の仏陀の慈悲にささえられているのである。朋友は無限の信賴の友ということになつてゐる。

三、大 転 換

常觀師の入信は師が二十八才の時、明治三十年のことであつた。これより先、清沢瀟之師は明治時代の有力な思想家であり、而して結局は浄土眞宗の信仰に入つた人であるが、併し本来非常な理想主義の人であつて、明治二十九年にいわゆる白川党事件^{シロカワトウ}を惹き起こした人である。此の清沢師の理想主義が常觀師をも動かして、常觀師も此の白川党事件に活躍せられた。

白川党事件は東本願寺の肅清運動^{シュウセイウツドウ}であつた。清沢師及びその一派の住居が京都市外白川村にあつた故に白川党と言つたのである。その肅清運動といふは財欲の枢府^{シュフ}となつていた東本願寺を肅清しようといふのであつた。此の運動によつて常觀師もまた理想主義の人としての色彩が非常に鮮明になつた。而して常觀師の大煩悶はその翌年のことであ

れを説んで見ると、眞実の朋友といふものは善きことがあれば悦びを分け合い、災難に出会つて苦しむというような場合にはその苦しみを分つて慰めあうというように、同心一体ともいふべきものが眞の朋友の間柄であると述べられている。これは師がその生活の上において親しく体験したことを述べられているのである。併しながら世間の朋友關係といふものは利害による關係が多く、利害が無くなれば互に離れてしまふといふものが多い。人間といふものは五分五分根性の止まないものである。こちらから五分だけよくすれば先方からも五分だけよくなる。五分だけ悪く思えば先方からも五分だけ悪くおもふ。どんな場合でもあくまでも見すてない温かい友情を持つてゐる友人といふものはなかなかあるものではない。併しどうかそんな友人がほしいといふのが師の衷心の願ひであつた。此の願ひが入信によつて満足せられた。それで師にあつては仏陀は無限の同情を持つ友人でもあれば無限の慈悲の親でもある。友人と親とが一つになつて、そこに久遠の慈悲といふものが感ぜられている。そこに師は無限に温かい親であり友でもある。仏陀を生き生きと感じていられる。

此の仏陀の慈光の下においては此の世の友人關係も単なる人間の五分五分關係ではなくなる。現に常觀師と池山師との關係の如きは正にそのとおりであつて、仏陀の慈光の
る。

おもりに清沢師の理想主義に偉大なる刺激を受けて活躍した常觀師はやがてその理想主義の行きつまりに出会したのである。胸にいだける理想はなかなか実現せられないのみか、自分自身にその理想を裏切るものがあることに目がさめたのである。ここに常觀師の深刻な苦悶煩悶が始まる。それは師の学生時代であつた。肅清運動のためにほど身心を勞し、東京に帰られた師は三十年二月頃から身体が無闇に疲れて心が何となく苦しくなつて来た。朋友の間が仲のわるいことに先ず気がついて、それが苦になつてたまらなかつた。それを何とか仲よくさせようとして慰めたりして見たが何の効能もなかつた。そこで他人を不足に思うようになつた。世の中は思うようにならぬと思うと世の中といふものが悪いと考へるようになった。人に対して隔て心が起る、人を疑うようになる。自分は親切をつくしてゐるのに、先方はなぜあのように悪くするのであるかと恨み心が起つて来る。はては世界中の人を誰を見てもいやになつて来たといふ。

此のような心の有様で四月八日の釈尊降誕会を迎えても少しも面白くない。書物を読んでも教場に出ても面白くもなければ解りもしない。あらゆる悪い心が起つて来て、仏様も一向有り難くない。人間が全く物質的になつてただ飲

食の欲ばかりとなり、人を殺すのもおそろしくもないような気が起り、自分が死ぬことも何ともないように思い、五月二日の晩には自殺をしようかと思つた。前には同情心があつた自分が全く無情の人間になつたという愚痴がおこり、人が自分を侮るように感ぜられ、我が枕頭には仏があり聖教があるのに、なぜ心が安らかにならないかと悲しみ、以前は一たび立てば人を動かすことが出来て友人の間でも至誠の心を以て遇せられたのに、今は人が自分を塵あくたのように見ているという邪推が起こり、たまたま親切に慰めてくれる人があれば、その親切に対して感謝の心が少いと自ら責め、人を感化すべき自分が他人の感化を受けて何の面目があるかという奇妙な考をさえ起こし、見るもの聞くものが皆苦悶の種となり、最後には、我が臨終近づけり、しかもなお菩提心の起らぬは何故ぞ、自殺しようと思つたらば勇らしく自殺せよ、併し自殺して果して何処へ行くかというところまで行きつまつた。

右のとおりであつて、此の時の師は正に善導大師のいわゆる二河白道の行者の自覚が起ろうとする危機に立つたのである。自殺するか破天荒の事を為すか、二者その一を撰ぶべしと叫んで苦悶の極に達した。此の前年にはあの藤村操が煩悶の極、遂に死を決して華嚴の滝に飛び込んで死んだ事件があつたので、師は此の事を思うて、あれも決して

ては苦悶の頂上で、一つの小座敷の中を足をつま立ててぎり／＼舞つて居られたということである。

此の時、師は大無量寿經の五悪段の一言々々が皆師自身のことを書いてあるように感ぜられた。「なまけていて善を行わず、身を治めず、家業をも修めない。一家族全体が飢え、こごえ、苦しんでいる。それで父や母が教えいまして、むれば目を瞞らせて怒つて口ごたえをする。言葉も和かでない。たとえばかたきのようなもので、かような子は無い方が宜い。」此のお経の言葉が一つも他人の事とは思われなかつた。併しそれでも、どうしても仏様を有り難く拝むことは出来なかつたという。そのうちに筋炎という病氣になつて非常な痛みが起り、夜眠ると知らずしらすひひいと泣き叫ぶという有様、その時に令弟は兄君常観師を看病して、その叫びが腸にこたえて恰も鋸でひかれるようであつた、後に思い出してもぞつとするほどであつたということである。

此の筋炎は父君の果断によつて長浜病院で時機を失せず手術を受けて危い生命を取りとめられることになり、九月の十五日に退院、その十七日にはじめて病院に切り口を洗いに行く途中、車の上で、自分は罪の塊である、実に極悪である、自分は生きて居るといふのは名前ばかりで、実は此の途中の石塊とあまりかわりはないと思つて、淋しく味

無理ならぬことと感したのである。

やがて学年試験の時になつた。併し右のような有様であつた為、師は学校をやめて坐禅に出掛けようと考えたが、此の時親友の一人が「是非とも試験をすませよ、君が学校をやめるならば自分も学校をやめて君と一緒に行く」と言うてくれたので思い直して友人の助けを得て、試験はすませた。

然るにその次には松島の仏教夏期講習会に出なければならぬという問題がひかえていた。これは師が発起者として五年ほど前から始めたものであるから、責任ある講習会であつた。缺席するのは非常に罪であると思ひ、止むを得ず思いきつて行つたのであるが、多数の顔を見るのが何よりも苦しく、松島の風景も面白くもなく、二週間友人に苦悶を訴えて人をいじめ通した。その時に、世の中に真実の朋友が欲しい、如何なるときにも我を見限らず、満腹の同情を以て我を慰め我を導く友人をほしいとしみじみ思つたというのは師の告白である。

かようにして松島の講習会を終つて東京に帰り、それから前にも述べた尾張の友を訪ねて二晩泊り、その後近江の家に帰られたが、物を食うても黙つている、何を話しかけてもしつかり挨拶もせぬという有様なので、父君が叱つて見たり慰めて見たりされたが何の効も無く、八月になつ

気無うて堪らなかつたと告白せられてあるが、正に此の時仏陀の慈悲は師の生命に徹していたのである。

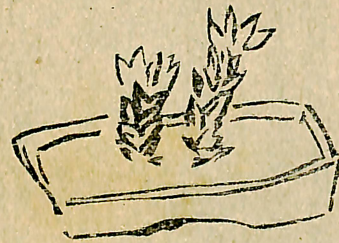
その病院からの帰り途に車上ながら虚空を望み見た時、俄に気が晴れて来た。これまでは心が豆粒のように小さくあつたのが、此の時胸が大いに開けて白雲の間、青空の中に吸い込まれるように思われた。何だか嬉しくてたまらないうで、家に帰つたが、叔父が私の顔を見て、どうしたのか一時に顔が變つたと、大層喜んでくれた、と述べられているが、ここに師の信仰上の大転廻が行われたのである。歎異抄に「廻心ということ唯一度あるべし」と言われている、その唯一度の廻心を体験せられたのである。

此の大転廻の原動力となつたのは父君の一心である。実に父君は常観師の幼少の時から一心をこめて導きたまひ、今此のよろこばしき時に値ひたまうたのである。常観師の方から言えば、その衷心から求めに求め居られた真実の朋友こそ仏陀であつたということであるが、その真実の朋友を発見させたのは父君の念力である。ここは友は親であり、親は友であるということになつた。常観師は今後の一生涯ただ一筋に親である仏陀の慈悲を説かれることになつた。

常観師の大煩悶中の心境を觀えば、その苦悶の内容は悉く道徳問題である、人のため世のために尽すべき身が尽さ

れない、自分には隔て心ばかりがあるという深刻な反省である。その極致は深刻な罪悪観であるが、併し師は少しも不道徳なことを行つた人ではない。印度の竜樹は若き時に放逸な行があり、西洋のアウグスチヌスは随分乱れた行におち入つた過去を持つている。然るに常観師には少しもかようなことがない。清沢師に鼓吹せられた大理想に生きようとして宗教界革新の大活動を行い、その場句に身心共に疲れ、理想は行きつまつて大煩悶に陥り、その極点に至つて父君の一心によつて信心を開かれ、仏陀を生き生きと感ぜられるようになった。ここに常観師の真面目があると思ふ。

未完



〔埋草〕

ゆく雲

筑紫野春草

ゆく雲のあととどめぬすがしさを願ひて久しわが日ぐらしに
音もなく流れさりゆきかへるなしみつつきびしも川といふもの
こもり沢の源に住みて鳴く鳥はかすかなりけり我來しかたは
もろとも心よすべき畢竟ひつきやうえ依みなこそ永久とよはのいのちと知らば
おほけなけれと善道大師が召されたる色にも似たりわが紅衣べにころも
おもふことうらなくいひて恵まれし法礼は今日をくちすぎてあまりぬ
白髪とあいう
ちちのみの父の齡となりけり白髪かかぶり頬骨けり
ありし日の父をし知れる人もなし五十五年の年月の経て
御父のかたみと見るは經文を写し給へる文字のいくばく

耳の底にのこるもの

柳瀬留治

一、石つころの私を憐れみ拾つて下さるほとけ
私が初めて佛のお慈悲に驚いたのは、「石ころの私を憐れだ」と拾い上げて運んで下さる」とのお言葉にびつくりしたのです。

そのことを書けと申されるので、私の驚きの一ふしだけ述べさせて頂きます。

それはもう四十年前も前のことですが、思えば常音先生のおつしやつて下されたお言葉が耳の底に聞えて来るのです。慥たしかか盆の十六日でした。あの古い求道学舎で、先生のお部屋でした。

私が長い間人生の光とし、求めていた信仰が、迎むかも判る望みがなく、絶望に追いつめられ、又人生生活の上で、同僚間全くの孤独に陥り、行き先が真つ闇になり、居たまられず、べそをかき常音先生の所へ行つたのです。その時私にいつて下されたお言葉です。

先ず私は自身が絶望に立ち到つたことを申しました。

「だん／＼判ることと思つた信仰は、右も高い煉瓦塀、左も同じ、左右が愈々合した隅に来て、到々信仰の絶望な人間になりました。それに人生上、全くの孤独になり居場所がなくなりました」

と訴えるのでした。先生は

「如何にも君は困つたであろう。いよ／＼そうなり困るであろう。すでに兄常観が、求道学舎を起し、人生に行き悩む者、行き場所のない人の世界がここにある。直ちに來いと待ち設けているのだ。道を失い、立場を失い、くら闇に陥つたものが憐れだ、可愛想だ。この佛の心一つにより念佛を唱えよといつているのだ。法然聖人、親鸞聖人をはじめこのお慈悲一つに生死を打ち任せられ、今現にわしも兄貴もこの佛の御憐れみに生命を托しているではないか。君もこのお慈悲一つに打ち任せて何の遺憾はないではないか」

と懇ねんごうに説いて下されるのでした。所が私は相変らず、「私には判りません」

と答えるのです。先生は、

「判らずともわしの言うことが聞えるであろうが」

と仰言る。私は

「聞えませんか」

と申すのでした。先生は

「わしの言う言葉の音波だけは聞えるだろう」

と仰言るのです。

「お言葉は聞えますが、お慈悲が聞えません。聞其名号もんごみょうごう

と申しましょう。その名号が聞えないのです」

というのです。それで先生は、

「君はそういう尊いことが聞える耳だと今日まで思っていたのであるが、言葉だけしか聞えないのが耳なんだ。我々の耳はそれが聞えるだけだよ。君の耳にはわしの言う音波だけは慥に聞えるなあ……」

この一言、生れて初めて聞いたのです。初めて自分の分際
に目が覚め、不思議なお声が聞えたのです。先生は静かに、

「君今日迄、特別なことが聞える耳だと思っていたのだ。それが迷いなんだ。言葉しか聞えない分際なんだ。何か特別なことの聞えるものと思ひ、聞えませんが、判りませんといつて払い退けて来たんだ。それで無始以来、今日まで流転輪廻を続け、それが尽未來際、聞えませんが

で果てるのだ」

と言われるのでした。誠にそうであつたと思うのですが、
逆も判りましたとは申せず、又も先生を払い退けて逃げようとし

「でも先生、そうお聞きしましたが、信じる心も起きませず、有難いという心も起りません。私の心は石みたくに固く化石していて、信じることも喜ぶことも出来ません」

と申しました。先生は、

「そうであろう。君の心は石なんだ。化石して自由を失い、信ずることも、喜ぶことも出来ない。それが石なんだよ……」

君を石だと見て取つた佛は、石である君に、感覺も意識も持たぬ石に、信じることも、喜ぶことも、感謝も出来ぬことは元々御承知の上のことなんだ。

石を石と見て取つた佛は、その自由が利かず、動けない石が、路傍で踏まれ、蹴られて果ててゆくのを憐れに可愛想で、仕て見ようがないので、拾いあげてウシ／＼運んで下さるのだ。有難いではないか……否、君なんだ。有難いなど思えないんだ」

……先生、その運んで下されることも、無感覺な私には意識されないんです」

と申すと先生は、

「君は石なので無感識で判らないのだ。君は石で知らん
でいる。知らんではいるものを、何処々々々でも運んで下さる……どうだ、憐れんでどこ／＼までも運んで下

されば安心ではないか……頼まれもせぬ者をなあ……」
と言ひ終り。先生は膝のお手に合掌をくみ、口の中でお念
佛唱え乍ら、静かに私を見守つていられるのでした。誠に
重くて動けぬ石、それを憐れみ、抱き上げ下下さる……

「先生何という不思議なことですね。私は転げて動けぬ
ままです。あんなにもたわやすく夢のようです……何という不思議でしょう」

とあつけに取られてしまいました。先生は、

「石が佛に抱き上げられ、南無阿弥陀佛、／＼と念佛し
ながら運ばれて行くのだよ」

と仰言るのでした。私は急に重い石を佛に引受けられてしまつて、体も心も綿のように軽くふわ／＼になり、縛り
解められていた綱が急に切り放つて頂けて「こちらがどう
思おうと思ひまいとゆるがぬ」とのお慈悲、何と自由自在
なことか……嬉しいやら有難いやら夢のようです……永
い間「どうも私には判りません」と払いのけていた私は、
始めて「有難うございました」とお礼が申せたのです。

それから私先生にお暇して、多分歩いて巢鴨に帰つた

ことと思ひますが、足が地面を踏んでいるのか、宙を歩いて
いるのか、夢心地でした。「何と不思議なお慈悲だろう。
不思議なことがこの世にあることか……不思議なこと
だ」とつぶやいて歩いてきたことを覚えています。
今迄狭く、まつくらであつた世の中が、急に明るく、涯
しない広く、何の遮る物もなく、凡てのものが生き／＼と
輝いているのです。「このお慈悲一つある以上、人生何を
しても生きて行ける」世界に怖いものなしになり、不思議
で不思議で、狐につままれたようでした。
誠に、信じも、喜びも出来ぬ「石ころ」の私です。「唯
念佛して」運ばれてゆくだけです。

二、噛みごたえのない粥

それからというものは、人生遮るものない、広々とし
た天地に放たれた心地で、この念佛一つあれば、人間一匹
自由自在に生きられるという、生まれて初めて青年期の元
氣を得たのでした。

この他力念佛の信仰は、易行の易行、実にたやすい道で
あり、万人が万人、誰もがわかる道だと思つたのでした。た
だ自分の自力迷妄で立てた方角を固執し、難しくしている
ので、佛の御憐れみはその私の迷妄を根こそぎにお引受け
下される。その慈悲が余りにも意外な大ききで、我々の
恩恵とは全くの桁はずれな為なのです。

仰いでただ／＼念佛するだけ、何とたやすい佛の本願であるかと、すつかり肩が軽くなり、浮いた気になつてゐる中に、自分が冷たい石ころで泣いていたことを忘れてしまつたのです。

念佛が余りにもたやす過ぎて、お粥のように歯ごたえなくする／＼と口を通り、どうも噛みしめて味わうということの出来ぬたわいなさ、それに腹に入つてから、飯を食べお餅を食べた後のように腹ごたえがない。何だか物足りない、という心持になつたのです。

元々私は信仰一つで人生に立つ腹が出来ること許り思い込んでいたのです。それにどうも信仰というものでなく、何だか無信仰のようなのです。

扱てさて、又間違つたのであらうと思ひ、常音先生の許に伺に行つたのです。そして、お聞かせ頂いた念佛が、噛みごたえのないこと、腹だもちのないことを申し上げたのです。先生は

「君はお粥しか喉を通らぬ病人なんだ。噛みごたえのある物はおいしいであらうが、それが食べられない病人なんだ。それなのに噛みごたえのあるもの／＼と思ひ、人生に食べるものがなくて飢えて転げ込んだのではないか。固いものの食べたいのは、それは君の迷いなんだそれで君は久遠劫来、今日まで流転輪廻を続けて来たのだ。君

所に力を入れて、掴もうとするのです。

或時、先生は「心身徹透」ということを説かれ、

「徹底し得ないものに飽くまで徹底して下される佛のお慈悲である。こちらは何処までも不徹底である。冷たい氷を以て佛を避えている我々を、飽くまで照らし融かさずんば止まぬ太陽の光、それは佛である。如何なる水と雖も、太陽の前では力なく融けて恐れ入るのみである。禪に不徹会というのがある。こちらは不徹である。それに徹して下されるのは佛の慈悲である」

と仰せられたので、今迄徹しようと思つて聞いていた私はびつくりしたのです。何と大きな心得違ひして聞いていたことであらう。こちらは永劫徹しない石ころである。徹して下されるのは佛のお心一つであつた。又しても又しても飛んだ心得違ひをしては佛のお心を遮る私なのです。恥じ入り、恐れ入つては念佛する次第です。

秀存師語録

明信寺曰く、人皆仏の心知らんとのみ欲して、仏の我心を知り給ひたることを思わぬなり

そんなに念佛のお粥が物足らぬなら止めてはどうか」と申されるのでした。「警沢いうなら元の通りの御破算にしよう」と仰言るのでした。

私はびつくりしたのです。私はよい気になつて、病人だつたことを忘れてしまつたのです。念佛のお粥が食べるにたやす過ぎるなど先生に甘えて申し出たのです。この念佛の在しませずば、心は真暗な闇だけなのです。お粥の外何物も喉を通らぬ私です。「まずいだらうがこの粥を食べて飢を凌いでくれ」とは何という有難い仰せであらう。縁もゆかりもない路傍の石ころの私に、何という親切な佛の仰せであらう。

私共の自我我執の迷妄は、遠い過去から今日に至り根強い習癖となつて居るようです。又しても心が闇になるのは、自分の暗い心の一方許り眺め、本願の不思議を仰がないことからだと思ふんです。泥川の泥沼のように崩れては底に泥が溜るのです。堪えかねては日曜を待つて、常観先生の御講話を聞きに参るのでした。先生のお口から堰を切つて出る、佛の遺る瀧ない清らかな水に、心の泥が押し流されては、晴ればれさして頂いて帰ることでした。

でも又しても思惑の坪で聞こうとするのです。「確り聞こう」とか「心に沁みて有難くお受けしよう」とか、自分の石ころ」であること「泥沼」であることを忘れ、飛んだ

私ほうろく／＼しています

さうかそのうろく／＼して居るものを御助け下さるのじや。

一たび一むきとなりて弥陀をたのみ奉れば、この後は、右をむいても、左をながめても、十方諸仏のこれを証誠し給うことを見るなり

或人云く。どうも私は、吾身のわろきいたずらがおもいつまりませぬと。答えて云く。いたずらものがいたずらものと思いつまらぬなれば、それでいよく／＼おもいつまるなり。いたずらものでありながら、それがいたずらものと思いつめられぬようないたずらものをと、おもいつむべし。古語に云く「地につまずいて倒るもの、地に支えられて立つ」と。

北越の眞信尼云く。

山越に「あるべき甚兵衛」という人あり。如何なる事起るも、この人常に「あるべきこと」といへば、人々かく名けたるなり

求道会館の磬石

花田正夫

伊勢湾台風の大混乱時に、高松から御見舞い下さった長岡鶴吉様から次の逸話を聞かせて頂きました。長岡さんは酒見忠勢先生の御手引きで近角先生のお育てを蒙られた方で、そのお話は次の通りであります。

慈光誌に「求道会館の石の鐘」という題が出ていますが、それについて思い浮ぶことがあります。それは求道会館が落成した時、四国の信者の方から大きい磬石が贈られたので、落成式の前日、会館につるされました。すると皆のものが珍しがつて、しきりに磬を打つてさわいで居りましたが、どうしたことか、その磬石が二つに割れて落ちました。すると口々に、釣り方が悪かつたとか、あまり強く叩きすぎたとか、誰が悪い、彼が悪いと言いつつていると、大きな音に驚かれた常観先生が、どうした〜と、エライ勢いで来られた、そこでそこらに居た人々は、自分ばかり合いはないと言う風に散り散りに姿をかくしました。先生は割れた磬石を拾い上げてじつと見つめて居られ

石を二道会館にお送りしましょう、こちらで活用して下さい、云云。

以上が長岡さんのお話であります。その夜私はこの磬石のことをあれこれと嬉しく想うて居りました。……お蔭で思いもかけぬ不思議な御因縁の磬石を頂いたのであるが、さて私自身「自分の責任である、わしが悪かつた」と先生の如く言い得るであろうか。私の平素の心は全くそれと真反対で「相手の責任である、われよし」の思いばかりである。……とつおいつ、そうしたことを省みて居りま

ずと

「賢者の信は、内に賢にして外は愚なり」

「愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり」

「愚禿のお言葉が身にしみ、更に、愚禿悲歎懐の

「蛇蝎奸詐のころにて、自力修善はかなうまじ。

如来の廻向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせん」

の和讃が心に浮びました。

そこで大いになすかされましたことは、「われよし」

の心しか飛び出さない相対五分五分の人生に「われ悪し」

と各告り出て下さることは、仏心の建現であるという一事

でありました。

憶うに日本の二千五百年の歴史において、最初に「凡夫である」、「枉れる者である」、「愚者である」と名告り

ましたが、やがて人に物語られる様に

「……お前も遠い四国から、明日の落成式を祝つてはるばる来てくれたのに、わしの管理の仕方が悪かつたばかりにひどい破目にあわして了うた、すまんことだ……」

とつぶやかれたのでした。するとそこへ建築責任者の某氏が

「……先生、私の注意が足らなかつたのです……」

と申し出る、そこらに姿を隠していた人々がめいめいに

「……私共の責任です……」「乱暴に叩きすぎたのです」と自然に名告り出てことはおさまつたのであります。先生はこのことを余りお話になりませんでした、それは信仰と道徳を取り紛らうことのないようにとの御用心からでありました。律法的にそうならねばならぬとか、そうあるべき等と聞くと大変な間違いになるから……

其後、二つに割れた磬石を頂いて、今日まで家に保存させて頂きましたが、物は活用されてこそ尊いので、その磬

出て下さつた方は、万人衆知の聖徳太子でありました。聖人の太子奉讃に、

「和国の教主聖徳皇 広大恩徳謝し難し

一心に帰命したてまつり奉讃不退ならしめよ」

と、日本にお生れ下された仏陀でましますと聖人は随喜満ちて居られるのも、むべなる哉であります。

其後、叡山に天台をひらかれた伝行大師は「愚中の極愚、狂中の極狂、底下の身……」と名告られ、その流れを汲まれた源信僧都は「予が如き頑魯の者、云々」と表白していられます。

更に法然聖人が「十悪、愚痴」と名告られ、親鸞聖人が「愚禿」と名告られて、そこに仏心の顕彰を仰ぎ、大乘相應の地としての尊さにふれるのであります。

憶えば、無慚無愧にてはてる身が、幸にも如来廻向の御名告りに照されて、無慚無愧の身を、無慚無愧の身と知らしめて下さるのであります。……

十月の末日、御心こめて下さつたけい石が無事に到着いたしましたので、座右に掲げて、御来庵下さる方々に由来を語りつゝ、いよ／＼私自身の上に何くれと活きて仿いて下さることを喜んで居ります。

編集後記

十二月号は、近角常観先生の忌月として特

集号のようになりまして。さて省みますと先生の御育てを深く身にうけ、実語を耳底に残された方々が御来庵下され、御身にしたる法水を時に触れてはお頒ち下さることは、蓬戸不出の私への生ける先生の御使者と有難くお迎え申して居ります。

新鴻の佐藤強三郎さん、小室華雲さん、鳥根の三瓶徳英さん、東京の柳瀬留治さん、北村乘雲さん、能登川の発願寺さん、高松の長岡鶴吉さん、九州の荒巻政次郎さん、養老の景陽寺さん、飯塚サダさん、大阪の大字佐平治さん、等々、黄色黄光、白色白光、青色青光の莊嚴さを教えられて居ります。今後共に皆機方の御来庵を鶴首して居ります。

△柳瀬様の御原稿は、常首先生の七週忌に滋賀県の西瀬寺様へ御参詣になつての御帰途、お忙しい中にお立ち寄り下さつて、お話し下さつた要点であります。台風一週間前のこととてゆつくり拝聴させて頂きました。

△福島先生の御原稿は早く頂いて居りましたが、御忌月を待つて発表させて頂きました。近角先生が御遊学なさいました歐洲の

各地は、福島先生も御旅行せられましたこととて、深い感慨をもつて御書き下さつたものであります。二回に渡つて頂きました。御写真も先生から御貸与頂きました。

十一月廿三日。釜石市の渡辺灌水器が御同行四人と、本山の報恩講詣での途中御来庵下さいました。まことに心地よい晩秋のよき日、法雨に浴し得て、喜び限りないことでありました。

灌水器は第十八願の「至心」を「ドゥゾ」。「信樂」を「オネガイダカラ」。「欲生我國」を「キテオクレ」と意識して居られた時、京都の浄住寺で、池山先生が「一心正念直來」を「オネガイダカラ、スグキテオクレヨ」と訳されていたのを知られ、唯々感無量で、言葉も出ない程であつたとのことであります。聞く私も襟を正さしめられました。初めてお目にかゝり乍ら、遠く深い御縁の強さに呆れるほかはありませんでした。

足利浄円先生から頂きました御手紙の終りに
罪障を功德の躰となしたまう
御名こそ我のいのちなりけり
とありました。ことに歳末一入ありがたく頂きましたので誌しました。頂いたものでもてなす田舎かな、と聞きますが私も亦老師から頂いたもので歳末の辞とさせて頂きます。御無事御迎春の程を。 聚墨生

御案内

△毎月、第一、二、三日曜、午後一時半、一道会館、日曜講話。市電、新郊通り一丁目下車、東一丁半。
（一月は三日から始め、正信偈の話にいたします）
△毎月二十四日、午前、午後、昭和区小椋町、敬西寺、法話会。市電、御器所通下車。桜花学園東角。
△一月九日、午後、千種区仲田本通、乗西寺、法話会。
△一月十六日、安城市山崎、正法寺、報恩講。

定価 一部 二十円（送共）
半年 百二十円（送共）
一年 二百四十円（送共）
名古屋市南区新上町二ノ三八
編集・発行人 花田 正夫
名古屋市中千種区千種町馬走三八
印刷 人 本田 政雄
名古屋市南区新上町二ノ三八
発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番